KIREI COLUMN

「子供たちの未来づくり」⑰

「つながる」ということ

県内のほとんどの学校で、中学2年生の2月頃に「立志式」が行われる。これは、古来の元服にちなんで大人になる自覚を深めることがねらいとされている。

今年、諸塚村の諸塚中学校と、小林市の須木中学校の立志式に招かれて講話に行った。それぞれ中学2年生が、19人と8人という小規模校である。これまでにも中山間地域にある小規模校には何度も行ったが、どこも例外なく素晴らしい。子供たちが規律正しく、挨拶も清々しい。学校と保護者との密接な協働ぶりも目に見えてよくわかる。

須木中では、小学5年生と中学2年生との合同立志式だった。いずれも今年から最上級生になる年だ。双方にとって刺激になるだろうと思った。小学5年生にとっては上級生ばかりの前で意見を発表するという緊張感は相当なものだろう。そして3歳年上の中学2年生の志を直接聞くことで、3年後の自分と重ね合わせて、将来の姿を描くことができたに違いない。異なる学年の間での「つながり」こそが、毎年の学びの「積み重ね」になり、子供たちに本物の力をつけさせていくのではないか、そう感じる式だった。

学校と家庭との「つながり」も大きなテーマである。先月末に、機会あって福井県の中学校を視察した。そこで知って驚いたことがある。それは、福井県の小中学校では、学期末に通知表を、子供へではなく保護者に直接手渡すのだそうだ。欠席した保護者には家庭訪問して渡すほどに念が入っている。このことによって、保護者が学校や子供の情報を詳しく知ることになり、子供の学びへの関心も深まる。だから福井県での家庭学習の習慣は並すぐれている。学校と家庭との「つながり」が学力向上の大きな支えにもなっている。宮崎県でもこのような取組みに挑戦する学校が生まれてこないだろうか。

諸塚中学校ではうれしい体験をした。山々に囲まれて限界集落と言われるほどに人口減少が続くが、子供たちにとっては何でもない。将来は諸塚に戻って林業をやりたい、役場に勤めたい…と元気に発表した子が何人もいた。私はその子たちの声を聞きながら、涙が出て止まらなかった。これは、家庭と学校との「つながり」の強さがあるからなのだろう。この夢が実現してほしい!、と強く思った。

文／日向市キャリア教育支援センター長
水永　正憲

日向市キャリア教育支援センターホームページ　日向市キャリア　検索